

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】朱 琳(シュ リン)

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員

【研究題目】 歴史認識と体制構想——近代日中の「聯邦論」を中心に

【研究の目的】

助成者は、近代国家の建設を緊急課題とする19世紀末20世紀初めにおいて、日中両国の代表的な知識人がいかに歴史像の再構築によって国家体制のあるべき姿および変革の方法論を提示し現在から未来への道を打開しようとしたのかに関心があった。そして、これまで資料収集および博士論文執筆の過程で得た啓発の一つは、大正日本と中華民国のつながりの深さに気づかされた点である。明治期の両国関係に比べると、大正期の両国関係に関する研究は少ないものの、特に思想文化及び人的交流関係は相当に活発であり、当該時期の中国思想の理解のためには大正日本の思潮の理解が欠かせない。当時中国の国家体制の構想をめぐる日中の議論は、まさにこういった思想的連環の好例である。

助成者は、「封建—郡県」をキー概念に、近代日中の「聯邦論」に光を当て、両国の代表的な知識人の歴史認識と体制構想の関連を分析し、大正時代の日中思想的連環の一側面を明らかにさせることを目的とする。今年度は地元の記念館や資料館を見て回り、関連する資料の収集に取り組み、取り上げられる対象の残した文献類を主な素材として思想史的テキスト分析を中心に考察を行なった。と同時に、彼らの歴史認識の背景となる思想家の議論、その他の同時代の人士の議論にも目を配って包括的に研究してきた。

【研究の内容・方法】

助成者は新しい視角の発掘とともに、新しい史料の蒐集にも取り組み、構想力と実証をあわせもつ研究を行なうことを心がけ、基本的には資料の分析と史料の調査を研究方法の両輪にして研究計画を展開してきた。

秦以降、政治体制の選択をめぐる「封建—郡県」論は、ときには「公—私」、「地方分権—中央集権」などの議論とも重なりあっており、社会体質論になることもあれば、歴史発展段階論になることもあり、複雑な様相を呈している。清末に「封建—郡県」論が一つのピークを迎えており、とりわけ辛亥革命後アジアにおける最初の共和国が成立したにもかかわらず政治的混乱が依然として続いていた中で、目指すべき国家像がどのようなものなのかについて意見が分かれていた。そして、1920年代前半にいたると、「聯省自治運動」が大いに盛行し、「聯邦制」の是非をめぐる議論が一層活発化するようになった。日本と深く関係していた孫文、戴季陶、梁啓超、章炳麟などがことごとく白熱化した議論に加わった一方、内藤湖南、山路愛山、吉野作造、橘樸など中国に関心の高い代表的な日本の言論人もそれらの議論を意識しながら論説や著書を通じてそれぞれの見解を披瀝した。

助成期間中は地元の記念館や資料館を見て回り、関連する資料の収集に取り組み、取り上げられる対象の残した文献類を主な素材として思想的テキスト分析を中心に考察を行なった。と同時に、彼らの歴史認識の背景となる思想家の議論、その他の同時代の人士の議論にも目を配って包括的に研究してきた。既出の全集・選集に収録されていない文章を含め、研究課題と関連する主要な新聞・雑誌に目を通し、できるかぎりの資料調査をしてきた。加えて、研究するにあたり、関連分野の内外の研究者と交流しつつ、研究成果の報告を行なうことで、自身の視野拡大と研究精度の向上を図った。

一部の研究成果として、「二つの中国認識——吉野作造と内藤湖南」(『吉野作造研究』7、吉野作造記念館、2010年11月、15-29頁。第2回「吉野作造研究賞」優秀賞受賞)などに反映されている。

【結論・考察】

近代日中両国の代表的な知識人の歴史認識と体制構想の関連、とりわけ「聯邦論」に光をあてて分析した結果、大正時代の日中思想的連環の一側面を浮き彫りにさせることができた。一方で、日中双方の「聯邦論」はともに政治体制の選択をめぐる「封建—郡県」論の系譜上にありながら、それぞれ際立った特徴があったことを確認できた。それは時期や立場の変化によって変わっていた。

これまで体系的に検討されていたとはいいがたい「聯邦論」について考察する本研究は、東洋史の分野で、とりわけ知識人の思想と活動の理解について、新たな知見を提示できるのみならず、今日においても議論の焦点となり続けている中国の国家体制や政治改革の問題と意味を考慮する際に新しい重要な示唆を与えうると考えられる。

この度「松下幸之助記念財団」の研究助成を受けたおかげで、順調に研究を進めることが出来た。財団関係者の皆様に心より御礼を申し上げたい。今後、博士論文における関連部分を基礎に、さらに深く掘り下げあるいは広く展開する一方で、今回の研究課題で得た成果を論文の加筆・修正に生かし、単著の早期の公刊を目指す。